

連載
第37回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

戦後復興から現代へ

7、常円寺祖師堂の再建

三十七世及川真学上人の最後の悲願

時代が昭和から平成へと移った平成三年（一九九二）正月、檀信徒に向けて次のような文章が発せられた。

常圓寺祖師堂建設の趣旨

常圓寺三十七世 及川真学

平成三年を迎え謹んで新春年頭の御祝詞を申し上げ、あわせて貴家の年中安泰と御清祥を祈念いたします。

さて、当山は天正十三年（一五八五）九月の創立でありますから、約四百年前から続いている寺であります。その間、度々の盛衰がありました。昭和二十年の大戦で諸堂が悉く焼失しましたことと、都市区画整理で境内地、墓地等の地形が変わったこと、又多数の檀信徒の方々の住居が戦災で遠隔の地に移転したこと等が最も大きい変化でありました。

しかし、戦後四十五年の間に熱心な檀信徒の御協力によって諸堂もほとんど旧に復し、信徒の数も増加し米国へ新しいお寺を建立することができるほど発展することができました。このことは仏祖の冥加はもとよりであります。矢張り変わらない檀信徒の護山護持のご協力と共に、又、異常に変貌した新宿の土地柄のせいでもありません。

ともあれ、当山は戦前の姿以上にまで発展することができたと思われませんが、ただ一つ祖師

堂の再建が出来ておりません。ご承知の方もあると思いますが戦前には祖師堂があつて胎蔵

のお祖師様をお祀りしてありました（天保十二年一八四一、江戸鼠山感応寺が幕命により撤去されたとき、本堂は鎌倉妙本寺に、祖像は成子常円寺に鼓樓は池上本門寺に移されたもので

す。この度の大戦のときも、この祖像は八王子の近村に疎開してありましたので無事にお守りすることができて、戦後今日まで当山の納骨堂に仮安置してあります。このお像を立派な祖師堂に安置して給侍することが私の最後のお願いと思つて新祖師堂の建立を發願いたしました。

「戦後」という言葉の実感が徐々に薄れ、戦災で灰燼に帰した常円寺も復興し、その寺基の安定と共に、熊谷に幼稚園を開園し、アメリカサンノゼに妙覚寺別院を建立するなど、この新宿の寺外にも発展していくなかで、真学上人にとって大きな悲願が残されていた。それが祖師堂の再建であった。

江戸時代より「胎蔵の祖師」として信仰を集めた祖師像（『福聚山史』第9〜12回）は幸いにして戦災を免れてはいたものの、そのお像を安置するお堂の再建が実現できないでいた。平成二年（一九九〇）七月頃より、その計画が役員・総代会に議題としてあげられ、進められていたが、何はともあれ課題は、その建設資金である。その建設費は約六割をお寺が積年この再建事業のため積み立てた資金で賄い、残り四割は檀信徒の寄付を募ることとした。この寄付勧募にあつては、東京都の許可が必要となり、平成三年（一九九一）三月二十六日に申請し、同

年四月十九日に「募金許可」がおりている。

また、祖師堂ののべ床面積は六三一坪とされたが、境内での用地確保にあたり、平成二年（一九九〇）十月、新宿区に「常円寺児童公園」の返還を求めている。当時、境内には遊具が設置され児童公園として開放しており、その場所も用地とすることにしたのである。

ところで、先の祖師堂建設の趣旨書では、再建されるお堂の名称が「祖師堂及国際会館」とされている。その意趣は先の文に続けて次のように述べられた。

しかし、又翻つて考えますと、この貴重とも言える新宿の土地の建物は祖師堂だけでなく、もつと多目的に使用することがよいという意見もありますので、地上八階建地下二階にして、本来の宗教活動にふさわしい建物を建てることにいたしました。地上一階、二階は祖師堂と納骨霊碑殿に、地下一階は大ホールになります。これは檀信徒や地域社会の皆様幅広く開放して、葬儀やその他の会合・集会に利用していただき、納骨殿は墓地のない方や一時的に遺骨の保管を求めている方にも利用いただく計画です。その他の階は仏教を勉強する国際留学生や宗門の学生寮として便宜を与え、又、図書室等を設けて仏教を中心とした文化活動のために活用していただくよう願っております。

地上八階、地下二階建てのビルとして再建されることとなった祖師堂は、その屋上に鐘樓堂も設置され、本来の礼拝施設として機能する他に、副都心として発展してきた新宿の地という

特性を生かし、ホールや会議室、また寄宿施設を備え、檀信徒のみならずさらには国内外を問わず、幅広い人々に開放された施設として新生することとなったのである。

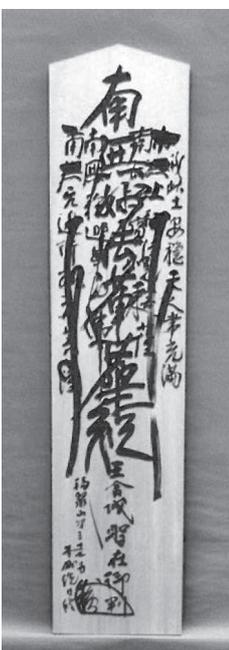
ところが、この事業の最中、平成四年（一九九二）三月十九日、三十七世及川真学上人は、その完成をみることなく遷化する。後事は、住職を継承した及川真介上人に引き継がれ、平成四年（一九九二）十月八日に完成する。その完成にあたり、真介上人は次のように述べている。

師父が建立を發願いたしました祖師堂が完成いたしました。ひとえに皆様方の御芳情御援助のたまものと厚く感謝申し上げます。インドでは宗教が盛んで、人々が集う場をアシラムと言います。草ぶきのお堂のことです。またアーラムとも言います。いこいの園のことです。新しく出来た祖師堂が質素ではあつても集う人々の心のやすらぎの場となることと願つて止みません。六、七、八階は東南アジアやインド、スリランカからの留学生が止宿して勉強する場として提供いたします。常円寺もいよいよ国際色豊かなお寺になるでしょう。世界的な視野に立つた情報が集まつて来ることを期待しております。

（常円寺祖師堂落慶のしおり）

本年平成二十四年、祖師堂は建設から二十年を迎える。この間、本来の礼拝施設としての機能に加え、寄宿舎として長期、短期にかかわらず祖師堂を利用した入居者はのべ百人以上にのぼる。また、会議室やホールは数多くの会や催し物に連日利用されてきた。各階の施設や活

用のありかたは、近々では大震災の被災者受け入れなど、この二十年の時代の動き、社会の動きにあわせた変化をしてきたが、今後建設当初の趣旨が揺らぐことなく、多くの人に開放された交流の場として提供されていくことであろう。



祖師堂建立にあたり揮毫された棟札。真学上人の絶筆本尊である。